

サイレント・ウェイ式教授法による 仮名文字の導入

—「サイレント・ウェイ式仮名導入表」の使い方—

川口義一（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

chuankou@waseda.jp

0. はじめに

筆者は、2008年の秋からサイレント・ウェイの教授理念に従って、仮名文字の導入を行う方法を考え、自身がコーディネーターを務めるJSL初級クラスにおいて市販の五十音図を使って実践していたのだが、2009年の秋に独自に「サイレント・ウェイ式仮名導入表」を開発し、2009年春学期(2009年4月～7月)から前述のJSLクラスで使用し始めるとともに、各地で使い方の解説をして、興味のある方には試用していただいている。

本稿は、この「サイレント・ウェイ式仮名導入表」の開発を考え始めたきっかけを述べ、そのひらがな導入用の表とカタカナ導入用の表を稿末に掲げて、それぞれの表の構成を解説し、使用法を述べるものである。一読して興味をお持ちになった読者には、ぜひともご自分の担当されるクラスでお使いいただきたいと願うものである。

1. なぜ、今、サイレント・ウェイか

縫部(2001:27-28)によれば、1970年代から1980年代にかけての外国語教育の理論的基盤は、社会言語学と人間心理学であるという。同書には、「外国語学習は言語学のみ立脚した教授法では不十分で、隣接諸科学を採り入れ本質論・目的論を原点に戻す考え方」が取られるようになったと述べられ、その文脈において「人間中心の外国語教育」を目指す教授法の中にサジェストペディアやCLLと並んで、サイレント・ウェイが挙げられている。筆者もこの考え方には賛成であり、さらに縫部(2001)から10年経とうとしている現段階では、もはやコミュニカティブ・アプローチの特徴と言われる「学習者中心(learner-centered)」の理念もこれからの時代の教授法を導くものにはなりえず、すでに「学習者主体(learner-oriented)」の理念が広く展開し始めていると言ってよい。「学習者主体」というのは、単に学習者の学習ニーズや習得過程に目を向ける(すなわち「学習者中心」)だけでなく、学習者の一人ひとりが社会のどんな状況の中で、周囲のどのような人々との交流を通じて言語に対する学びを作っているのかという点に注目する考え方であるが、このような理念が生まれるのは、学習者やビジネス・パーソンだけでなく、日本の各地域に暮らして日本人とともに生活しながら日本語を学習する外国人やその子弟が学習者として登場するようになってきたためである。このような現象は、学習ニーズの多様化を生み出し、もはや一定の組織された教育機関において決められたカリキュラムにしたがって学ぶのではない学習者の「学び」を社会的な文脈でどうとらえるか、そもそも「学び」というのはどのようにして主体的に起こるのかなどが日本語教育の中で無視できない問題になってきたために生じたものである。

近年、「学習者主体」の理念が日本語教育のさまざまな分野でますます盛んに議論されるようになってきたため、具体的な教室活動・教授活動をどのようにすればよいか次第に見えにくくなってきた。というのは、オーディオ・リンガル・メソッドやコミュニカティブ・アプローチには、「構造中心」にせよ「学習者中心」にせよ、それなりの教授テクニックやシラバスの作り方が示されているのだが、「学習者主体」の理念を具体化するためにはどうすればよいかに関しては、特に中心となる理論が存在しないからである。そこで、これまでに開発され提唱されてきた外国語・第二言語教育論やコミュニケーション論の中から、この新しい潮流にふさわしい学習観や教育観を再考してみるという動きがいくつか起こっている。その一つが、前述の縫部(2001)のように、1970年代前後に生まれた「新教授法」、すなわちサイレント・ウェイやTPRをとらえなおして、そこに学習者の学びに目を向ける「人間主義的」な色合いを再評価する方向への動きであり、本稿の筆者も、まさにこの動きに従うものなのである。

筆者は、「新教授法」の再評価を行うときには、特定の教授法で日本語教育の全分野をまかなおうとは思っておらず、それぞれの教授法の理念的特徴が生かせる分野を選んで応用している。すなわち、文法教育にはTPRやナチュラル・アプローチを、発音指導にはヴェルボ・トナル法を、漢字や語彙の指導にはコグニティブ・マッピングを、というようにである。そして、初級最初の学習項目となる仮名文字の導入には、サイレント・ウェイを使っている。というのは、「学習者主体」が叫ばれ始め、教師は「ティーチャー(teacher)」ではなくて「ファシリテーター(facilitator)」であるべきだという議論が出て久しいのに、仮名の指導となると、相変わらず教師が五十音を頭から読み、学習者がそれに従って唱和するという、極めて「教師中心(teacher-centered)」の教授スタイルから抜け出していないためなのである。ここを「学習者主体」にしなければ、日本語教育は新しい世界に向けて歩を進めることはできないと思う。そして、「教師が教えなくても、学習者が主体的に仮名を学ぶ」というクラスを実現するためには、「教授の、学習への従属(subordination of teaching to learning)」が教育の「常識(common sense)」であるべきだとする、ガッターニョの教育理念を再評価し、応用しなければならないのである。

では、次章からは、具体的に「サイレント・ウェイ式仮名導入表」がどのようにできているか、そしてそれをサイレント・ウェイの理念に従い、学習者の学ぶ力を信じて、使用するためにはどのようにするか、順次解説していこう。仮名表自体は、本稿末尾に「ひらがな表」「カタカナ表」の順に掲載されているので、そちらを見ていただきたい。

2. 「サイレント・ウェイ式仮名導入表」によるひらがな導入

2-1. 「カラー・チャート」との違い

サイレント・ウェイの入門時の発音指導といえば、単音を色に置き換えたあの「カラーチャート(color chart)」を使って「文字でないもの」を読む、すなわち、実際にはあてずっぽうに音を出してみるということで、教師のモデル発音を聞かずに目標言語の音韻体系を再構成していく教授テクニックをまず思い浮かべるであろう。しかし、仮名文字はシラビックな音のまとまりを文字にしたものであるため、アルファベット型表記の欧米言語のように、カラー・チャートを作る必要はなく、始めから市販の五十音表を基にして作った「仮名導入表」を使い、文字を見せながら仮名文字の発音を導入することが可能なのである。

2-2. 「あ行」音の発見

まず、黒板に「サイレント・ウェイ式仮名導入表」のうちのひらがな表を貼り付けて、学習者に日本語には五つの母音があって、それがいちばん右の一行であることを説明する。その後、ポインターで「あ」を指して、この音が何であるか類推して出してみるように学習者に指示する。「あ」の音はどの言語にでもある基本的な母音の一つであるため、「母音を出してごらん」と言うと、多くの場合は「あ」が出でくる。「あ」の音を出した学習者が特定できたら、その学習者にもう一度同じ音を出すように促して、その音でよいことを、「はい、その音です」と声に出して確認し、他の学習者にも言わせる。全員が「あ」と読めたところで、次に「い」を指して、同じように進める。もし「あ」を指した時に「い」と読む学習者が多かったら、そこで「違いますよ」とは言わずに、むしろ「い」を指して、「それは、この字の読み方です」と教えて、練習させ、改めて「あ」に戻る。これがサイレント・ウェイの、「教授は学習者の学びに従属する」という重要な理念の現れるところなので、いつも念頭において意識して指導していく。

続いて、同様にして「お」「え」「う」と進む。この順に進むのは、「お」と「え」は、言語によってさまざまな音で表されたり、もともと無かったりするの、「もっと唇を丸くして(「お」が「あ」に近くなったり、あいまいな音になったりする場合)」とか「もっと唇を横に引いて笑うみたいに(「え」が「い」に近い場合)」などと指示して、口の形を変えてトライさせるなど、指導に工夫が必要なことがあるためである。それでも、学習者が試行錯誤してきれいな音が出るまで、教師は我慢して待っている。けっして、モデル音を出して聞かせて、「まねしてみろ」という指示をださないことが肝要であり、これも、「教授は学習に従属する」という理念の指導上の現れと言える。

それでも、「お」と「え」は初めから正しい音が出せる学習者がいて、早い段階で全員が出せるようになるものだが、「う」になると、唇を前に突き出す、深い[u]の発音をする学習者のほうが多くなるのが普通なため、その場合は「違います」と言って、正しい音が出るまでトライさせる。もちろん、途中で正しい音が出せるように、「唇を引いて」とか「おなかが痛くて、苦しい時のうめき声みたいな音」などと、学習者のトライの手がかりになるようなヒントを与えることは、かまわない。それは、「教える」ことではなく、「学ぶのを手伝う」ことだからである。正しい音が出たら、他の母音と同様、「はい、いまのマリアさんのが正しいですね。はい。マリアさんもう一度。はい、みなさんもうどうぞ」というように進めて、練習していく。

2-3. 「か行」から「わ行」まで

次に、「か行」から「わ行」までを示し、それがすべて子音と母音の結合したシラブルであること、および母音の列に横に並ぶひらがなは、すべて同じ母音を共有するシラブルであることを教えて、「か」から読み方の類推をさせる。あとは、母音のとくと同じく、発音が変わったら正しい音が出るようにヒントを与え、指したひらがな以外の音で読んだら、そちらの音に該当するひらがなに飛んで、「それは、こっちですね」と言いながらもう一度読ませるなどして、学習者のトライした音がどこかの文字に結びつくように指導していく。濁音・半濁音は、ひらがなを指したあと、表の左はしにある濁音記号と半濁音記号にポインターを移し、該当する記号をひらがなの右上の端に運ぶような動きで示す。拗音は、同様に「や行」の小さい文字をひらがなの右下に移すようなポインターの動きで示す。

この間、ウ列音、特に「す」「つ」「ず／づ」の「う」が他の「う」よりさらに狭い母音であること、

また、この四つと「ふ」は、子音が同じ行の他の音と違うことに注意させる必要がある。また、「ら行」音・「ざ行」音などは少々やっかいだが、何日かかけてやればよいので、一つずつ正確に発音できるまでやらせるのではなく、初回はとにかくざっくりと五十音を終わらせることを目標にするほうがよいだろう。「ん」は、唯一子音だけの文字だが、「な行」の頭の子音だったり、「ま行」の頭の子音だったりする、鼻に抜ける変な音だということで、適当に指導して問題ない。なお、これらの少々やっかいな子音を含むシラブルを教える時には、ヴェルボ・トナル法のテクニックが役に立つのだが、ここでは詳細にふれる余裕がないので、川口(2008)を参照されたい。

2-4. 単語・文の導入

濁音・半濁音・拗音まで進んだら、単語を導入する。例えば、「い」と「す」をポインターで指し、音を続けて「いす」の音を示して読ませる。このとき、「す」のほうを「い」より少し高い音で読むようにジェスチャーなどで指導すると、アクセントも同時に学べる。平板のアクセントが難しいようなら、「まど」のような頭高型のアクセントを持つ単語から始めるのがよいだろう。アクセントも含めて、ちゃんと読めるようになったら、それが「椅子」や「窓」であることを説明して、次の単語に移る。できるだけ短時間のうちに、4拍（「ふでばこ」など）から6拍（「こくばんけし」など）ぐらいの単語に進んでおく。「これは、本です」のような短い文も、導入可能である。

次に「い」「う」「つ」の色違いの文字を使うことばの表記を指導する。これは、それぞれ「え」で発音する「い」「お」で発音する「う」「促音」の表記である。つまり、緑の「い」を指したら「え」と読めと指導するわけである。これらは、もう単語のレベルでないと指導できないので、「とけい」「ぼうし」「ざっし」などの単語例で練習する。「がっこう」などの複合したものも、積極的に扱うようにする。促音の小さい「つ」は、「おおきな休止」として導入するのがよく、「ダブルの子音」であるという説明よりも、次のシラブルの頭の子音へ行くときのポーズであるとして、その子音が発音されるまでゆっくり時間をかけて音を伸ばしているというイメージを与えるほうがうまくいく。これも、ヴェルボ・トナル法の応用で、分かりやすく示すことができるので、川口(2008)を参照されたい。表記上書かれた文字と異なる音で読む、助詞の「は・へ・を」も、同様にして簡単な文などを作らせて、導入することができる。例えば、「わ」「た」「し」「は」「す」「し」「が」「す」「き」「で」「す」とポインターで文字を指していき、今読んだ音の列は“I love sushi”という意味だと教えれば、助詞の「は」は「わ」と同じ色の発音であることが示せる。「わたしはおさけをのみません」では「は」と「を」を、「わたしはまいにちがっこうへいきます」では「は」と「へ」を、それぞれの文法的身機能に従って、特殊な読み方で読むことに気づかせるのである。

3. 「サイレント・ウェイ式仮名導入表」によるカタカナ導入

3-1. 市販の五十音表の不都合

カタカナの「SW式」導入も、同じように練習する。カタカタは、「外来音を表す」という重要な機能があるにもかかわらず、市販の五十音図ではひらがなと同じ五十音表の構成なので、カタカナの指導には不都合だった。こんなに広く使われているカタカナ五十音図が不便なのに、なぜみんな我慢して使っているのかという意識から、筆者の、この「仮名導入表」が発想されたと言ってもいいくらいである。この「サイレント・ウェイ式カタカナ導入表」の最大の工夫は、表の左の端に長音記号をお

いたこと、およびア行の音のすべてに小さな文字つけておいたことである。これによって、「ジュース」のような長音を含む単語と「グァ」「ティ」「トゥ」「ジェ」「フォ」「ウイ」「ヴェ」など、ひらがな表との対応では現れない音の表記を示すことが可能になった。これは、「デュ」を除けば、市販の五十音図では相当の工夫をしないとできないことだったのではないだろうか。

3-2. 新しい「行」の意識化

「ヴ」の表記を加えて「ヴァ行」の表記を示せるようにしたこと、「シ・チ・ツ・フ」を緑色で示し、ひらがな表よりも積極的にこれらのシラブルの子音が同じ行の他のものと異なることを示したことも、カタカナのあるべき機能をはっきりと指導できるようにしたところである。このカタカナ表では、パワーポイントのスライド画面1枚に納めるために断念したが、実を言うと「シ・チ・ツ・フ」は、それぞれ、「サ行」・「タ行」・「ハ行」とは別の行を作って並べてもいい（下の図参照）と思っている。そのほうが、「サ行」の「スイ」や「タ行」の「トゥ」や「ヤ行」の「イエ」などが入ってくる位置を、より明確に示せるものと考えられ、「外来音を表す」カタカナのシステムがよりよく分かるのではないかと思う。読者諸氏のご使用になるときに、本稿の導入表から新しく表を作ってもいいだろう。なお、言うまでもないことだが、ヴァ行音の読み方はバ行音と同じだと指導する必要がある。スペイン語と同じだと言えば、欧米の学習者なら分かる者も多いかと思われる。

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ワ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | サ | カ | ア | | |
| | × | ミ | ヒ | ニ | チ | シ | キ | イ | | |
| ン | ヴ | ユ | ム | フ | × | ヌ | ツ | ス | ク | ウ |
| | | メ | ヘ | ネ | テ | セ | ケ | エ | | |
| ヨ | ヨ | モ | ホ | ノ | ト | ソ | コ | オ | | |

なお、表の×印からも分かるように、「ハ行」のウ列音、「ヤ行」のイ列音はカタカナでは表記不能である。このことは、説明しておいたほうがよかろう。したがって、「ハ行」のウ列音を持つ中国人名、例えば「何さん」は、「フーさん」とか「ホーさん」とか書かざるを得ない。同じく、ロシア人名の「ニコライ」の最後の“й”も「イ」と書くほかはない。また、「ワ行」のウ列音もウで代行させるしかない。

4. 市販の五十音図の「サイレント・ウェイ式」導入

本稿「0. はじめに」で、筆者は「サイレント・ウェイ式仮名導入表」を開発する以前から仮名の導入をサイレント・ウェイの理念で行ったと書いたが、それは市販の五十音図を次のように使ったものである。以下に、それをどのようにして行ったかを書いておき、市販の五十音図しか使えない環境でも、「サイレント・ウェイ式仮名導入表」を使うのと同じような指導ができることを示しておく。

まず、黒板に市販のひらがな五十音図(本章では、以下「市販式」と略称)を貼り付けて、「サイレント・ウェイ式仮名導入表」(本章では、以下「SW式」と略称)と同様に、ポインターで「あ」を指して、学習者に音を推測させる。次に「い」「え」「お」と進み、続いて「か行」「さ行」へ移るのも、「SW式」と同じである。

次に「い」「う」「つ」の欄に小さなマグネットを貼りつける。これは、それぞれ「「え」で発音する「い」「「お」で発音する「う」「促音」を表す。つまり、「い」のマグネットの部分了指したら、「え」と読めと指導するわけで、「SW 式」の緑の「い」と同じである。また、「う」のマグネットの部分了指したら、「お」と読めと指導するわけで、こちらは「SW 式」の青い「う」と同じである。「つ」の横のマグネットは、「SW 式」の赤い「つ」に当たり、「促音」である。これらの音が、もう単語のレベルでないと指導できないのは「SW 式」と同じなので、「とけい」「ぼうし」「ざっし」「がっこう」などの単語例で練習する。助詞の「は・へ・を」も、同様にマグネットを貼りつけて導入するとよい。

カタカナ五十音表も、同じように練習する。ただ、ひらがなの場合と違う工夫の一つは、大きなマグネットを準備して、「ン」の下などの空いているところに貼っておくことである。これは、「長音」の記号を表すので、「SW 式」の縦・横の赤い棒と同じである。「ジュース」などの単語例は、これで示せる。もう一つの工夫は、ア行の音のすべてに小さなマグネットをつけておくことである。これは、「グァ」「ティ」「トゥ」「ジェ」「フォ」「ウィ」「ヴェ」など、ひらがな表との対応では現れない音の練習のために、「SW 式」の黒い小文字を表す工夫である。もちろん、促音の「ツ」にもマグネットが必要なので、カタカナ表のためには合計6個の小さいマグネットと一つの大きいマグネットが必要となる。ヴァ行音は、「市販式」では五十音表に載っていないので、「ウ」と濁点と小さい「ア～オ」のマグネットを利用して表記の形を覚えておき、読み方はバ行音と同じと指導すればよい。濁点は、他の濁音の表記から点々の部分を引っ張ってきて示す。また、「シ」「チ」「ツ」「フ」が同じ行の他の音節と頭の子音が異なることも、「市販式」では色分けで示していないので、意識してしっかり教えなければなるまい。

5. 今後の課題

本稿では、「サイレント・ウェイ式仮名導入表」を開発するに至った経緯と表の使用法を述べた。開発以来、国内外の日本語教育機関でこの表の使い方を説明して回ったり、メールに添付して使用説明とともにあちこちに送信したりしたため、今では世界のいろいろなところで、「サイレント・ウェイ式仮名導入表」が使われている。そのうちの何人かの教師からは、使用の感想や質問が来ている。今後は、これらの使用者からの感想や質問から、この表の使い方によどのような工夫や注意が必要かを考えてみたい。また、これらのコメントの中には学習者の反応を書いたものもあり、おおむね今までと異なる反応や学びをみせたということなので、このような点についても、学習者にインタビューできる場合は直接聞くなどして調査し、教師の「教授」に従属させる学習者個々の「学び」とはどんなものなのかを分析してみたいと考える。

参考文献

川口義一(2008)「VT法による日本語音声指導」(戸田貴子編著『日本語教育と音声』所載)くろしお出版：117-136

_____ (2009)「サイレント・ウェイによるフランス語の教授と学習—その現代的意義—」(生井健一・深田嘉昭編著『言語・文化・教育の融合を目指して 国際的・学際的研究の視座から』所載)：開拓社：261-284

縫部義憲(2001)『日本語教師のための外国語教育学—ホリスティック・アプローチカリキュラム・デザイン—』風間書房

わ ら や ま は な た さ か あ
り み ひ に ち し き い い
ん り む む む っ す く う ろ
。 れ め へ ね て せ け え
を ろ よ よ も ほ の と そ こ お

ワ ヤ マ ハ ナ タ サ カ ア ア

一

リ ミ ヒ ニ チ シ キ イ イ

二

一

ヴ ル ュ ヨ ム フ ヌ ツ ス ク ウ ウ

一

レ メ ヘ ネ テ セ ケ エ エ

二

。

ロ ヨ ヨ モ ホ ノ ト ソ コ オ オ